

# 後拾遺集「恋四」の詞書をめぐる問題

実川 恵子

書をめぐる問題は、多々の問題を内包する内容研究にも、一つの新しい視座を投げかけるものであると思われる。

文中で使用した本文は、『新編国歌大観』所収、書陵蔵本に拠る。ただし、表記については、私に改めたところもある。

## 二

後拾遺集は、三代集に比べ、「題しらず」詠が減少し、長文の詞書が増加する傾向にある。この現象からも明確なように、後拾遺集はできるだけ歌の成立事情に係わろうとする姿勢が看取される。その傾向の強い中で、恋歌中でも特に「恋四」は総じて詞書が簡略である。

本稿では、その詞書記述に注目して、顕著な現象が見受けられる「恋四」巻を中心に、そこに内在する問題について考察することにしたい。

この「恋四」という巻については、武田早苗氏<sup>(5)</sup>が、恋愛の進行過程に即した歌の配列ではなく、「恋」というものの本質を追求しようとした観念的な詠歌で占められる、と述べられているように、

詞書の持つ本来の性質というものについては、定まった認識がない。また、それぞれの勅撰集についても、固有の問題があつて同等には扱いて得ない多くの問題を含んでいる。しかし、おおよその解釈は、①詠作された背景である場面や、時やところの記述②出典の表示③題材の表示、などが掲げられる。そして、これらの記述は、個々の作品解釈の指標ともなるべきもので、敢えて言うならばその撰者独自の作品理解の規定とも言うべきものという捉え方も可能であろう。そうした考え方からすれば、詞書の持つ機能とは、歌と密接な関係を有するものであるとも言えるのである。

そこで、こうした詞書が歌に及ぼす作品解釈への働きを、後拾遺集に即して考察してみたいと思う。

後拾遺集の詞書については、「……の心を詠める」のような詞書の増加が、当時の題詠意識の顕れと呼応する点や、歌合題絵柄などの明記、四季部に曆日的な詞書の記載が多数見られる点、また、雑部に顕著に見られる詞書の長文化の現象、その反面、恋部に於ける「題しらず」の問題などが論じられてきた。こうした後拾遺集の詞

「恋四」は、特異な性格を荷った巻として注目される。

それでは、この「恋四」の六二首の詞書記述を、その記述内容の性格から簡単に分類して見ると、大体次のように類別される。

④「題しらず」と記述する歌、35首（うち一首が読み人知らず詠、あとは作者名あり）、五六・五%

⑤恋愛状況を記述し、詞書中の人物記述は「男」、「女」、「人」というような普通名詞で記されるもの、9首、一四・五%

⑥固有名詞で人物記載するもの、4首、六・五%

⑦歌合の名称を記述するもの、5首、八・一%

⑧単に、「女につかはす」といった簡単な記載のもの、2首、三・二%

⑨暦日の記載と、「人につかはす」と記したもの、2首、三・二%

⑩恋愛状況のみの記述、2首、三・二%

⑪題詠の記述、1首、一・六%

このように分類した詞書記述の性格を、「恋四」の歌に即して考えてゆきたいと思う。

### 三

「題しらず」歌については、武田氏や武内はる恵氏に詳細な御論があり、それらに拠るところが大きいのだが、私なりにいま一度改めて「恋四」という巻を考察して見ることにした。

三五首にもぼる「題しらず」歌は、数首ずつまとめられて配置される。この様相は、他の恋部とは異なっており、何らかの文学的な意図を示しているような印象を受ける。では、いったい、これらの「題しらず」歌は、「恋四」において何を主張しているのだろうか。

最初の「題しらず」歌は、次の四首である。

み山木のこりやしぬらんとおもふまにいとど思ひのもえまざる  
かな (773、元真)

いはしるの森のいはじと思へどもしづくにぬるる身をいかにせ  
ん (774、恵慶)

あぢきなしわが身にまさる物やあると恋せし人をもどきしもの  
を (775、好忠)

われといかでつれなくなりて心みんつらき人こそ忘れがたけれ  
(776、和泉式部)

773の元真歌は初句を「み山木のこり」と詠み、樵るに、「懲る」を掛け、また、「火」「もえ」は共に「木」の縁語という技巧的な歌である。次の774も、初句を「いはしるの森」と詠み、共に木に関連する語から詠出される。この774も前歌同様、序詞や、縁語を用いた手法をとり、それらの趣向に重点を置く詠み方となっている。

続く、好忠歌775は、「恋せし人」を非難していたが、その状態を自らが経験すると、まさに自分の命に代えても、と実感することであるという心情を詠う。また、次の776歌は、作者を和泉式部とするが、桂宮本や『思女集』に典拠を求められることから、作者を疑う必要があり、当歌は「つらき人」に対する想いを詠む。

この一連の「題しらず」歌は、二首毎に同類の歌語を用いた歌や、技巧が勝ったもの、または自己の心情に絡ませて詠じた歌などを配列させている。

また、元真、恵慶、好忠は、『後撰集』撰者時代と称される第一期歌人であることも共通の要因として掲げられる。次の「題しらず」歌は、道濟歌780の、

人しれぬ恋に死なばおほかたの世のはかなさと人やおもはん  
である。真実味に乏しく、詞のうえだけで詠んだような観念的な詠  
歌である。なお、次歌781、頼宗詠も、初句を「人しれず」と詠む。

次は、783と786、四首の一連の「題しらず」歌である。  
なくさむる心はなくてよもすがらかへす衣のうらそぬれぬる  
(元輔)

世の中にあらばぞ人のつらからんと思ふにしもぞ物はかなしき  
(よみ人しらず)

夜な夜なはめのみさめつつ思ひやる心やゆきておどろかすらん  
(道命)

思ふてふことはいはでも思ひけりつらきも今はつらしと思はじ  
(兼盛)

783は、前歌782、国房の「思ひわびかへす衣の袂より散るや涙のこ  
ほりなるらん」の二句「かへす衣」に続いて、この歌語を詠んでい  
る。この兩首、前歌は、題詠歌で、どちらかと言えば美感には乏し  
いが、ある種の簡潔さを与えるような詠歌である。この783からの「題  
しらず」の四首は、道命歌に集約されるような自らの恋の体験を踏  
まえた、内面的な表現行為による詠歌で占められている。

閨近き梅の匂ひに朝な朝なあやしく恋のまさるころかな  
(788、能因)

あやふしと見ゆるとだえのまる橋のまるなどかかる物思ふらん  
(789、相模)

世の中に恋てふ色はなけれどもふかく身にしむものにぞありけ  
る  
(790、和泉)

これらは、能因歌の「閨近き」という新造語への注目、789歌の相

模らしい詠み口の技巧的な詠、そして、和泉独自の恋を色にたとえ  
た感覚的な詠歌と並列されている。この一連の歌は、詞書記載など  
消去されりうのような、和歌の独立性をも感じさせる詠歌群であらう。  
この四首後は、次の三首の「題しらず」歌である。

わが袖を秋の草葉にくらべばやいづれか露のおきはまさると  
(795、相模)

ありそ海の涙のまさごをみなもがなひとりぬる夜の数にとるべ  
(796、同)

かぞふれば空なる星もしるものをなにをつらさの数にとるべく  
(796、長能)

795は、前歌、道済の「庭のおもの萩のうへにてしりぬらん物おも  
ふ人の夜半のたもとは」を受けており、「草葉の露」「袖の上の露  
(涙)」を歌材とする。続く、796・797の兩首は、発想の転換をねらっ  
た歌を並べている。

この歌群から、二首の曆日的記載を伴った詞書歌に続いて、「恋  
四」巻最多数の「題しらず」歌七首の歌群を載せている。

たぐひなくうき身なりけり思ひしる人だにあらばとひこそはせ  
め  
(800、和泉)

君こふる心はちぢにくだくれどひとつもうせぬ物にぞありける  
(801、同)

涙河おなじ身よりはながるれど恋をばけたぬものにぞありける  
(802、同)

わが恋はます田の池のうきぬなはくるしくてのみ年をふるかな  
(803、小舟)

おほかたに降るとぞ見えし五月雨はものおもふ袖の名にこそあ

りけれ

(804、道濟)

よそにふる人は雨と思ふらんわが目にちかき袖のしづくを

(805、西宮前左大臣)

日にそへてうきことのみもまさるかなくれてはやがてあけずも  
あらなん

(806、同)

この「題しらず」歌群は、「恋四」のちょうど中央部に位置する。最初の三首が和泉式部歌、後部の二首を西宮前左大臣(源高明)の詠とする。この後拾遺集所収の高明歌については、清水好子氏の御著書等に詳しいので、それに譲るが、後拾遺集以前の勅撰集では全く入集のなかった高明詠が、突然十首という入集を見る。この現象は、明らかに何らかの特別な撰者の配慮であるという見方もできるのだろう。そのうえ、この十首のうち九首(うち五首が「恋四」歌)までが、恋歌で占められることも、後拾遺集の高明歌への一つの解釈と考えることもできるようだ。

801・802の和泉歌は、いずれも経信の『難後拾遺』にとりあげられ、801歌の恋の部に撰入した理由や、歌の内容に踏み入って非難している。続く802・803の小弁歌は、共に知巧的な詠歌で、それぞれ「涙河」「ます田の池」と、水の縁のある歌語を用いた歌を並べている。また、次歌804・805も同様に、「五月雨」「雨」を詠み、歌材に共通性が見い出せるのである。

808は、元真の、

恋しさのわすられぬべきものならばなにしかいける身をも恨み  
ん

である。この前歌も同じ元真歌であり、これには「天徳四年内裏歌合によめる」と詞書される。この808歌は、「天徳四年内裏歌合」の

撰外歌であり、両歌の区別の意を含ませ、「題しらず」と付すことで示したのではなかったらうか。

このような「題しらず」歌について、どうしても触れなければならないことに、「独詠歌」の問題がある。「独詠歌」について、後藤祥子氏は、「純粹に自己の心やりのために、内部の表現欲求にこたえて詠まれ、あるいは心中に浮かんだ歌の意」とされ、「歌だけが単独で、いかなる形であれ無条件に了解していく、そういつた価値を持つ歌が題不知歌としての登録に耐えたといっていくいだろう」と述べられている。こうした詞書に歌の一切の説明を排除しようとした方針には、和歌本来の本質を見直そうとした態度を詠みとることができのではなからうか。

その詠歌態度の源流を溯れば、古くは『万葉』の、大伴家持歌に見られるような自発的な動機に根ざす歌と称される独詠歌に、それを詠みとることができよう。自らの心中の思いを、見つめ、歌に表白していくことが、「独詠歌」の本質であったのであろう。

こうした姿勢が、時代を経てその対象を自然の景物に託して詠う方向へとかたちを変え、平安中期以降に見られる好忠や能因などの歌人に代表される叙景歌人へと継承されていくのである。そうした点では、後拾遺集「恋四」に見られるような和泉や相模に代表される「独詠歌」は、後の歌会歌や題詠歌等に見られる創作和歌に何らかの影響を及ぼしたのではなからうか。

#### 四

次に掲げるのは、詞書中の人名が固有名詞で記載された場合である。「恋四」には四例しか見られない。因みに「恋一」は八例、「恋二」一五例、「恋三」十例となっている。この四例を順

に列挙すると次のようである。

中納定頼が許にかはしける

あしの根のうき身のほどと知りぬればうらみぬ袖も浪は立ちけり  
(71、公円法師母)

堀川右大臣の許にかはしける

恋しさのうきにまざるものならばまたたびと君を見まし  
(702、大式三位)

中納言定頼が許にかはしける

恋しさをしのびもあへぬ空蟬のうつし心もなくなりにけり

(809、大和宣旨)

小弁が許につかはしける

君がためおつる涙の玉ならばつらぬきかけて見せましものを  
(810、経信)

定頼が二例見られる。「定頼」の人物記述は「恋一」に一例、

「恋三」にも二例、計四例が恋部に見られる。この定頼の詞書登場

について、武田氏は、特異な存在として注目し、言及され、この

ような「際立った人物像の創出」は、「説話文学の発展興隆と期を

一にする。詞書に逸話趣味的傾向が横溢するもの、この時代風潮と

けつして無縁ではあるまい」とされる。

全体に詞書記述の簡略化という傾向にあって、「定頼が許につか

はしける」などという詞書は、その個人名を意図的に表出させる効

果もあるのだろう。これは、「恋四」という巻にあって、前述した

ような武田氏のいう「逸話趣味的傾向」といえるのだろうか。もう

一考したい問題である。

歌合の名称を詞書の中に明記した歌は、次の五首である。

承暦二年内裏歌合によめる

恋すとも涙の色のならりせばしばしは人にしられざらまし

(779、弁乳母)

天徳四年、内裏歌合によめる

君こふとかつは消えつつふるほどをかくてもいける身とや見る

らん  
(807、藤原元真)

永承六年内裏歌合に

恨みわびはさぬ袖だにあるものを恋に朽ちなん名こそ惜しけれ

(815、相模)

永承四年内裏歌合によめる

いつとなく心そらなるわが恋やふじのたかねにかかる白雲

(825、相模)

うしとてもさらに思ひぞかへされぬ恋はうらなきものにぞあり

ける  
(826、堀河右大臣)

このように歌合の詠と明記した詞書は、他の恋部にはなく、歌合

からの出典を強調した記述であろうと思われる。この歌合歌の中に

相模の代表的な歌、815歌があるのも、興味深い点といえよう。

822、823、824は、入道撰政兼家と道綱母の贈答歌である。

女の許につかはしける

わが恋は春の山べにつけてしをもえ出でて君がめにも見えなん

返し  
(大納言道綱母)

春の野につくるおもひのあまたあればいづれを君がもゆるとか

見ん

おなじ女に

(入道撰政)

春日野は名のみなりけりわが身こそとぶひならねどもえわた

けれ

823の作者である道綱母が、822の詞書には「女」という普通名詞で記されている。また、次の824歌も敢えて「おなじ女に」と記述する。これらの贈答歌は、『蜻蛉日記』にはなく、他の資料に拠るものだろうが、こうした普通名詞の記述は、歌物語の地の文や、私家集の詞書を想起させる私的な色彩を感じさせる。このように、固有名詞ではなく、あえて普通名詞で人物記載すること自体に何らかの意図するところがあったと思われる。

では、この三首の内容に踏み入ってみよう。822は、兼家の道綱母に対する求婚の歌、823はそれに答えて軽いなした道綱母の返歌、そして824の常套的な意志表示の歌である。これらは、別に特異な恋愛状況を詠んだわけでもなく、内容的には、初期の恋愛状態を詠んだ「恋一」に、入集されるべき歌々だったように思われる。しかし、それが特に「恋四」の終盤部に近いところに配置されているのは、いかなる意味を持つのだろうか。

道綱母の詠が「恋二」700にある。それは、次のような歌である。  
入道摂政、九月ばかりのことにや、夜がれて侍りけるつとめて、文おこせて侍りける返り事につかはしける

さえかへり露もまだひぬ袖のうへにけさはしぐるる空もわりなし

詠歌事情は比較的長文の詞書によって語られ、詞書と歌が不即不離の関係を有している。恋歌においては、その両者の関わりやその状況を詞書に説明し、歌を詠出するというのが一般的なあり方なのだろう。それが、それらを一切省き、ただ対象となる人物だけを普通名詞で記すということは、異なった面で歌の解釈を試みようとし

ている一つの頭れではないだろうか。つまり、兼家と道綱母の恋愛のエピソードを前提としながらも、極めて簡略で作意的な部分さえ持つような詞書の記載に、歌物語的な世界を匂わせるあたりに、このような普通名詞で記載する詞書の意図するところがあつたものとも考えられよう。

二月ばかりに人の許につかはしける

藤原道信朝臣

798つれづれと思へばながき春の日にたのむこととはながめをぞする

五月五日に人の許につかはしける

和泉式部

799ひたすらに軒のあやめのつくづくと思へばねのみかかる袖かなここに掲げた二首は、詞書に暦日記述のある歌である。後拾遺集の四季部の暦日の展開については、既に述べられるところだが、この暦日記載は、798歌の「ながき春の日」を導き出す要素や、次の和泉歌では、五月五日に縁ある序詞を用いている。こうした歌との関連において暦日記載の詞書を並列させるのも、後拾遺集独自の暦日の重視という点を考慮しての記載とも考えられよう。

777(相模) 778(西宮左大臣) は共に「忍びて物おもひけるころよめる」という詞書を付す。単にその恋愛の状況のみを記すという方法は、その例を恋部には見ない。

また、次のような題詠の記述もある。

冬夜恋をよめる

藤原国房

おもひわびかへす衣のたもとよりちるや涙のこほりなるらん  
この歌は、前歌(791、堀河右大臣)の「袖をおほひつつなく」を受けて、配列された歌であらう。そしてその題意を「涙のこほり」「かへす衣」に込めた技巧法をとっている。

「恋四」の詞書記述の特色は、その時代相を色濃く反映している点にある。前述した詞書記述の分類からも明確なように、「恋四」は他の恋巻とは異なった分類意識が持ち込まれているようである。

その顕著な現象が、「題しらず」という詞書である。「恋四」の場合、この「題しらず」歌は技巧的な手法で詠出され、そこに趣向を詠みとるような歌の場合や、自己の心情の表白に主眼を置く歌に付された傾向が強いようである。敢えて、詳細な詠歌状況を必要とはせず、それらを削除していく方向から、歌独自の主張を試みようとした姿勢とも理解できるのではなからうか。言い換えれば、享受者を意識せずに、一歩しりぞいて、客観的に心情を表現する「独詠歌」である。この「独詠歌」が「恋四」には多く入集するのである。そうした意味で「恋四」という巻は、観念的な詠が多いということも充分理合でしよう。その巻末の二首は、この「恋四」という巻を象徴しているような次の詠歌である。

涙こそあふみの海となりにつれ見るめなしてふながめせしまに  
(81)、相模)

白露も夢もこの世もまほろしもたとへといはばひさしかりけり  
(82)、和泉)

この巻をとじる巻末を、相模、和泉詠を並列させた撰者の企てに、女歌評価への意欲をも感じさせているのではなからうか。

また、歌合の撰外歌を「題しらず」として区別する方法、特定の人物名の記述や、歌物語的な詞書記述、曆的記述など、「恋四」の詞書は、撰者の独特な創意のもとに生まれ、その編纂にも、かなり細やかな配慮がなされたものという捉え方も可能なのではなからうか。

うか。そうした考え方からすると、後拾遺集に女歌の果した役割は非常に大きいと言わざるを得ないだろう。そしてまた、女歌はこの後拾遺集成立期に大きく変質したとも言えるのではないだろうか。

〔注〕

- (1) 井上宗雄氏「再び『心を詠める』について」(立教大学日本文学) 39号・昭52・12)
- (2) 川村晃生氏「『後拾遺集』巻頭歌群をめぐって」(和歌文学研究) 42号・昭56・4)
- (3) 拙稿「『後拾遺集』の雑歌をめぐって」(立正女子大学短期大学部研究紀要) 10号・昭50・12)
- (4) 武田早苗氏「後拾遺集の四季歌・恋部の構成について」(横浜国大「国語研究」) 2号・昭59・3)
- (5) 武田氏前掲書。
- (6) 武内はる恵氏「『後拾遺和歌集』の「題不知」をめぐって」(和歌文学研究) 55号・昭62・11)
- (7) この記名作者の「題しらず」歌を武内氏は、「恋四」に28首として掲げられる。この数値は、どのような規準で数えられたものか、疑問である。
- (8) 上野理氏「後拾遺前後」(笠間書院・昭51) 五三三頁。
- (9) 『源氏物語論』(瑞書房・昭58)
- (10) 『和歌大辞典』「独詠歌」の項。
- (11) 「独詠歌論」(国文目白) 7号・昭34・3)
- (12) 武田氏「後拾遺集の詞書をめぐって」(中古文学) 39号・昭62・5)